

クローズアップ 20

『生き方としての進路指導』 黒曜石が教えてくれたこと



南区 南浦和中学校
教諭

野平尚彦

本校で進路指導主事をして2年目になる。今回雑駁ではあるが、進路指導について、生徒との体験を通じて得た自分の考えを述べてみたい。

1 神津島での感動

最近、進路指導とは、生き方を考えさせる指導であることを強く実感する。では生き方指導とは何なのか。それは、子どもが自ら生き方を考え、行動する、生きる力を育てることに他ならない。

生徒にはよく「人は変わる

ことができる。でもね、自分を変えることができるのは自分しかいないんだよ。」と話している。自分を変えられるのが自分しかいないとするならば教師は一体どうすればいいのか。授業であれ、部活であれ、学級指導であれ、何か一つでもいいから、これだけはこのものをもつことなのではないだろうか。そのような強い思いは、やがて生徒の内面に変化をもたせ、その結果として生徒自身が自分自身を変えていくのだと思う。

生きていく上で最も重要なのは、自分自身を突き動かしていく何かだということを感じた例をひとつ紹介したい。

教員一年目の夏、担任と保護者に頼まれて、数名の3年生と伊豆の神津島に行ったことがある。目的は、やじりなどに使われる黒曜石を探しに行くことだ。どうも社会科の授業で興味をもったらしい。大学生の集団に紛れるようにして、竹芝栈橋から夜の船に揺られた。その夜は快晴で、甲板に寝ころんでたくさんの流れ星を見た。翌日、汗まみれになって島を横断し、眼前に黒々とした黒曜石の地層を発見した時は本当に心が震えた。その後、もっと良質の石が、少し離れた島の海底にあると知った彼らのうち、ある者は、高校でスキューバダイビングの免許をとって再び島を訪れた。また、ある者は、

この体験をきっかけとして星をはじめ様々なことに興味を覚え、今は沖縄の三線に夢中に取り組んでいる。

私も、幼い頃、担任の先生が、育てていたヤゴが羽化するのを一緒に観察し、ほめてくれたことが、今の人生に大きな影響を与えている。

このように、一人一人が、夢中になれる何かを見付ける手助けをしてやるのが教師にできる進路指導の大きな柱なのではないだろうか。

2 本校での進路指導

本校では、第三学年の進路保護者会で『この道を行く』という進路向け冊子を配布している。毎年、一部の内容を更新しているが、何年も伝統的に受け継がれている。内容も、目先の進路だけではなく、生き方としての進路指導、受験の一年間を過ごす上でのノウハウなどが細かく書かれており、とても重宝している。

3 今後の課題

最近進路で気になることは、進学先等で、人間関係でつまづくケースが少なからずあるということだ。親や友達との信頼関係があって、はじめて人は自分を信じることができ、その結果として自立していく。あらゆる教育活動の中で、人間関係のスキルを学ばせていくことも今後大きな進路指導の課題になっていくのではないだろうか。

(のひら なおひこ)